

びわこ文化公園植物だより〔β版〕

フユイチゴ バラ科

- ・学名 *Rubus buergeri*
- ・園内山林の林床に自生



ぐっと寒さが深まるこの時期にふと林床を見てみると、小さな赤い実たちを見つけることができます。それらの種はフユイチゴといいます。



フユイチゴはその他の通り冬に実をつける匍匐性の常緑キイチゴで、日本列島の東北南部から九州、南西諸島まで広く分布します。日本にフユイチゴの仲間(フユイチゴ亜属)は全部で5種類存在し、日本のキイチゴ属の中で2番目に多い亜属です。その中でも、フユイチゴとミヤマフユイチゴは、分布が重複しており、同じ場所に混在するため、見分けが難しいですが、葉の先が丸く、両面にビロード状の毛が生えており、とげが少ない個体がフユイチゴで、葉の先がとがり、表面に照りがあり、

とげが多い個体がミヤマフユイチゴとみることができます。同じような名前であるコバノフユイチゴは、越冬後、雪が解け終わった初夏に開花し、8～9月に結実しますが、フユイチゴやミヤマフユイチゴは9～10月に開花し、12月ごろに結実を行います。

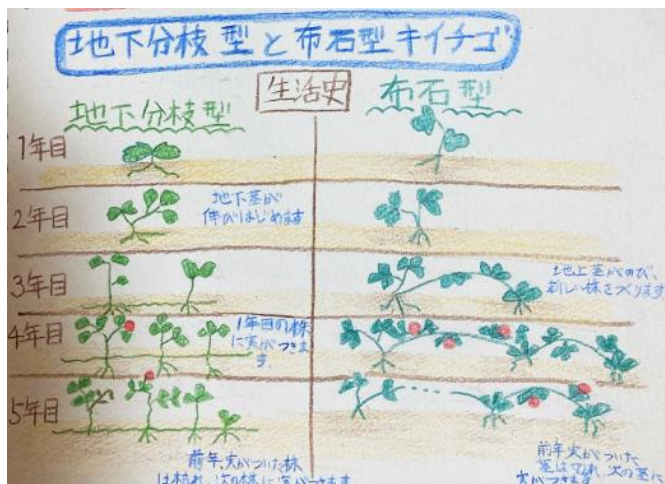
ところで、イチゴの仲間が種子による有性生殖だけでなく、種子に頼らない方法で株形成して大きくなることをご存じですか？日本列島に生育するキイチゴ属種は、それらの方法の違いにより大きく二つに分ける事が可能です。



一つ目はクローンを作り成長する種です。元株から地下茎(地上の茎が地下適応したものですが、便宜上このように呼ぶことにします)を伸ばし、その上に新たな芽を発生させ、そこから根を張って新たな地下茎をつなげ、次々と株を形成することでクローンによって大きくなっていきます。この種は地下分枝型イチゴと呼ばれ、クマイチゴやモミジイチゴなどが挙げられます。

二つ目は、無性生殖によって成長する種です。このグループの種は地上根をのばし、その先端部が接地して発根し、新たな株を形成します。元々の株(親個体)と新しくできた株(娘株)は地上茎が枯れると確実に分かれるため、無性繁殖とみなされています。このようなイチゴ類は、娘個体を作り、次の個体を形成しているため、「布石型イチゴ」と呼ばれ、フユイチゴはこのグループに属します。以下にそれぞれのグループの生活史を図示します。

どちらも、親個体が耐えうる良い環境下で素早く空いた場所を覆い、種子生産をおこなう賢い戦略と感じられます。また、地下茎や地上茎で離れた場所に娘個体を作るため、動く植物とみる事も出来ます。



❀ 冬の寒い環境の中、かわいい見た目ながら健気に生きるフユイチゴは [ここ](#) で見ることができます。私たちも厳しい冬をフユイチゴのように乗り切りたいものですね。

(クリックで Google マップにリンク。10メートル程度の誤差が出ることがあります)

(龍谷大学先端理工学部・楽原萌葉)